

春日宮曼荼羅部分

京都湯淺七左衛門氏藏



であらう。而して更に云へばこの一片の殘闕から我々は嘗て津田本と同類種類の三卷本天神縁起が更に一本存在してゐたことを想定し得るであらう。

津田本は知らるゝ如く永仁六年奉納の奥書を有ち、そこにその製作年時を確認し得ると信ぜられるが、この殘闕も亦それに前後する製作と認めてよいであらう。津田本は獨特の淡々たる筆技の時に描寫の纖弱を訴ふるものなしとしな  
いが、この殘闕の人物描寫には彫塑的感覺が働いてゐて一種の重厚味を帯びてゐるのが注目せられる。因みに箱書には詞堀川大納言通具卿、繪住吉法眼慶恩とある。

## 五二七 春日宮曼茶羅

京都 湯淺七左衛門氏藏

絹本着色 挂幅裝 一〇八・二寸(三尺六寸一分)  
横 四一・〇寸(一尺三寸五分)

一の鳥居を入れば左手(北)に西塔東塔の聳ゆるを眺め、小橋二つ三つ過ぎて右手に車舎、やがて袖垣ある二の鳥居を過ぎれば左手に著到殿、やがて小橋一つ過ぎて四面の廻廊それより巡る南門に至る。正面に拜殿その西側に直會殿その中に中門及び東西北廊その西側に移殿その奥に本殿四社。而して本社その西側に直會殿の南方小徑の奥に若宮、三十八所社。つぶさに圖するは春日の社地で、謂ふ所の春日宮曼茶羅である。本圖は更に上方に五の圓相中に若宮より四宮に至る五社の本地佛文珠釋迦藥師地藏十一面(本地佛については異説あれど述べては)を現し、最上部を三つの色紙形に區切つて贊を添へる。

綠樹繁茂する林園中櫻花映發し、群青の霞だんだらを染むる奥、御蓋山を背景として朱楹の殿舎は整然として輪奐靜謐の美を極め、中央を貫く金彩の參道は山端にかゝる望の闕くることなき月輪と共に一脈の神秘感を盛る。本圖、繪様は鎌倉室町の交の流布のそれと變ることなき乍ら、畫技の精微、保存の完好に併せて表装裏軸付の押紙に左の墨書あるによつてその尊貴なるを證せられる。近年世に知られて、直ちに春日宮曼茶羅遺品中の主位に座した。

正安貳年(庚子)十月被圖之、大施主正二位藤宗親、繪師觀寂法橋、御畫絹加

持制心上人、供養御道師權大僧都靜觀、銘太上法皇禪林寺殿、十一月十一日  
午時供養

この判讀中には容易に決定し難きものがあるが、人名のうち宗親は五辻家忠繼の次男乾元元年參議に任じ、その年六十二歳を以て薨ぜる人、尊卑分脈、太上法皇は禪林寺殿とあるによつて龜山法皇と知られ、圖上の贊は即ち法皇の宸筆と仰がれる。その他に至つては猶まだ明かにし得ないが、右その裏書によつて本圖製作の背景就中その製作年代を明確にし得る點に於て資料的價値を加ふるものであることは論を俟たない。

由來春日宮曼茶羅は吉野時代を前後する遺品に富むが、當代に於て春日の社頭の景色を描いて春日曼茶羅と呼び、之を社頭の儀に擬して供養尊崇することの流行せるについては、また花園天皇宸記正中二年十二月十二日條に清經の談として「此三四年、以春日曼茶羅圖三畫社頭之氣色以是號曼茶羅一近年毎レ人所持物也擬三社頭之儀、致三供物等種々之儀、尊崇他」云々とあるによつて徴し得る。しかしかゝる傳統が遡つて既に平安末期に存することは玉葉壽永三年五月十六、十七、に兼實の錄するところによつて又周ねく知られてゐる。當時藤原氏の長であつた右大臣兼實は奈良僧正の許より送り越された圖繪の春日御社に對し、齊戒沐浴して奉拜し、心經一千卷を轉讀、又七ヶ日の間に一族相並んで一萬卷を拜讀する等の並々ならぬ勤行をなしたのである。而してこの曼茶羅は七日間の禮拜供養の後再び奈良に返送されたのであつて、このことは當時は恐らくかゝる曼茶羅が後世に於ける如く流布せざりしことを暗示するものと解すべく、同時に他方奈良よりの曼茶羅の送致が一部の奈良本社參詣にも準ずる程の事件であつたことを知るならば、春日宮曼茶羅發生の因由の奈邊に存するかゞ窺はれると共にその發生の年代の之より左程遠からざるを推測して誤らないであらう。

この壽永より正中の流行以後の間、春日宮曼茶羅の形式手法等も恐らく幾變遷を経たに相違ない。それにつき、描かれたる建築物の改竄に關する年代的考證により、圖様の新古を判定することは試みられ、例へば東西兩塔は應永十八

